神　社

うちの近所にはいくつかの神社がある。ふだんは前を通っても、閑散としていて、境内で尺八の練習をしているじいさんくらいしかいない。お世辞にもうまいとはいえない演奏に合わせて、たくさんのカラスがカアカアとがなりたてるという、シュールな光景だったのだが、この間から、ちょっと様子が違っている。中年の男女の姿が、神社に目立つようになったのだ。どうしたんだろうと考えてみて、やっと、今が受験のピークだと思いあたったのである。

ある夫婦とおぼしき男女は、賽銭箱の前でもめていた。彼が五千円札を入れようとするのを見た彼女が、まさにお札が箱のなかに落ちようとする瞬間に彼の腕を掴み、

「ああ、もったいない」

と叫んだ。すると彼は、

「賽銭をけちって、何かあったらどうするんだ」

と真顔で怒っていた。彼の目が三角になっていたところを見ると、相当に切羽つまっているらしい。あまりの気迫に彼女はちょっとひるんだものの、

「そりゃあ、そうだけど、五千円はちょっと……」

と渋っている。しかし彼は、

「いいんだ。これで受かったら安いもんだ」

といい、ぶつぶつと何ごとか唱えながら、手を合わせていた。その隣ではやや不満げではあったが、かわいい子供の受験のためならばと覚悟したのか、彼女も手を合わせている。彼らの手に、力が入っているのは、傍で見ていてもよくわかった。そして彼らは長いこと気合を入れて拝んでいたのである。

別の神社にはお父さんが一人でやって来ていた。人気がないのを確認して、彼は鈴がついている布切れを力まかせに振りまわしたあげく、ばんばんと柏手を打ち、

「お願いします、お願いします」

といいながら、何度も頭を下げていたのである。

私の受験のとき、友だちの親はとても神経質になっていた。親はおろおろしているのに、受験する当人が、

「どこかに、受かるでしょ」

といったりして、

「こんなに親が心配しているのに、その態度は何だ」

と、もめた。しかしうちの場合は、私よりも親のほうがずーっと気楽に考えていて、緊張感がまるでなかった。緊張感がないどころか、母がどこに合格してもいいようにと、貯えておいた入学金を、父親がこっそり使い込んでしまった。母に責められた父は、

「だって受かると思わなかったんだもん」

といい、大騒動になったのだ。

こんな間抜けな親はうちくらいのものだろうが、ほとんどの親は子供に対する態度をどうしていいかわからないようである。妙に明るくふるまって、子供にうるさがられたり、また心配のあまり子供の後をくっついて歩いて、うるさがられたり、この時期、どちらにせよ、親はうるさがられる辛い立場におかれる。親の過剰な気遣いは受験生には負担になる。私の友だちは試験の前日、お母さんに、「これで力をつけて、がんばれ」と励まされ、食べ慣れないぶ厚いステーキを食べた。ところが見事にお腹をこわして試験を断念せざるをえなくなり、その後何日かは、家族一同が暗い日々を送ったという悲しい事実もあったのだ。

親は心配だから、何かしてやれることはないかと一所懸命に考える。子供の前では何気ない顔をしていながらも、不安でならない。きっと彼らは神頼みというよりも、不安を少しでも減らすため、鬱憤を晴らすために、やって来るのに違いない。ふだんは神社は何のためにあるのかよくわからないが、私はこの時期の神社の必要性を再認識したのである。

大新所局　『日本語上級讀解』　(群ようこ『交差点で石蹴り』より)